広報
かみす
2021年
No.340
1/1・15

Pick up
▶市長・議長から
新年のごあいさつ

まちの魅力再発見

特集

将棋盤

日本一の産地が紡ぐストーリー

“パチン” 将棋を指す音が響き渡ります。日本一の将棋駒の産地は山形県天童市。では日本一の将棋盤の産地は？実は神栖市です。全国生産量の8割を占めています。なぜ神栖市が日本一になったのか。そこには、漁業のまちとしての歩みが深く関わっていました。将棋盤とまちの歴史をひも解きます。

AR 広報かみすが動き出す

【COCOAR2】
アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は7ページ

特集

将棋盤

日本一の産地が紡ぐストーリー

世は将棋ブームに沸いています。神栖市と将棋には、切っても切れない縁があるのをご存知ですか？ 神栖市は日本一の将棋盤の産地であり、漁業のまちとして歩んだ歴史とも深く関わっているのです。今回は、将棋盤づくりの物語に迫ります。

はまぐりの碁石と船大工

ここ数年の将棋人気の火付け役と言えば、史上最年少でプロ棋士となった藤井聡太二冠。その快進撃により、将棋ファンの裾野が広がっています。

将棋に欠かせないものといえば、将棋盤。実は神栖市が、将棋盤の生産量日本一であることは地元でもあまり知られていません。いったいなぜ、将棋盤づくりが始まったのでしょうか。

波崎地域では鹿島灘特産のはまぐりの殻で碁石が作られ、昭和20年代後半から最盛期を迎えました。しかし良質な材料が手に入りにくくなり、やがて衰退していきます。一方、漁業や舟運が盛んで多くの船大工や樽職人が働いていましたが、時代とともに木造船は減り、醤油樽はプラスチック製に代わって行きました。

そうした時代の変わり目が重なって、船大工や樽職人が木を扱う技術を生かして碁盤・将棋盤づくりに転身。産地が形成されていきました。

手頃な卓上盤で将棋を普及したい

それではなぜ、生産量が日本一にまでなったのでしょう？　かつて波崎地域には碁盤・将棋盤の製造業者が5社ほどありましたが、いまも製造を続けているのは1社のみ。その茨城木工(株)が、なんと全国シェアの8割を占めています。代表取締役社長の泉謙二郎さんに、日本一への道のりを聞きました。

「いまから40年以上前に、一つの転機がありました。取引先の社長と、これから先、脚付きの高級盤に特化するか手軽に買える普及品を主力とするか議論し、私は迷わず普及品でいこうと決めたんです。まずは愛好者を増やすため、私たちが種まきをしていこうと考えました。その後、生活スタイルの変化で畳の部屋や縁側が少なくなり、テーブルに乗せる卓上盤やコンパクトな折り盤が人気となりました」

マス目を印刷し大量生産を実現

結果として、普及品に舵を切ったことは成功でした。しかしそれだけで日本一となったわけではありません。普及品は利益率が低いため、従来の手作業に頼った製法では行き詰まるのは目に見えています。そこで泉さんに妙手が浮かびます。それは、目を盛る(マス目を引く)工程を手作業から印刷へと変えることです。

「手作業では1日に1人100枚が限度で、線にもばらつきが出ます。なんとか盛り上がったマス目を印刷できないか探したところ、電気回路の印刷技術が応用できると分かりました。すぐに装置を導入し、大量生産が実現したわけです」

情報収集と試行錯誤を繰り返し、インク(人工漆)の調整にも苦労するなど、印刷という製法の確立までには丸2年の歳月を費やしました。

伝統に時代の風を取り込む

さらに、もう一つの壁が立ちはだかります。当時は将棋盤といえば伝統工芸品という感覚が強く、機械化はまさに常識外。しばらくは問屋で取り扱ってもらえませんでした。

「私は、伝承と伝統の2つがある

①

②

③

④

①碁石の原料となったはまぐりが採れる鹿島灘
②網船の新造祝い(明治)。多くの船大工が働いていた
③醤油工場が多くあり樽づくりが盛んだった
④木を扱う技術は碁盤・将棋盤づくりに受け継がれた

泉謙二郎社長

将棋盤（卓上盤）ができるまで

木材を一年以上かけて乾燥させる

工場内では多くの職人が作業する

木材を将棋盤の大きさに断裁

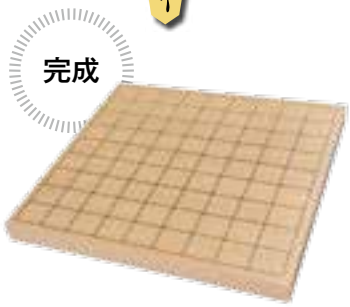
機械でカンナをかける

木目の風合いが美しく出るよう仕上げる

一つ一つ丁寧に塗装する

木材を印刷機にかける

盤面に目を盛る。命が吹き込まれる瞬間



のではないかと思っています。伝承は変わらず伝えられるもので、伝統はその時々の要素が混ざり合ってつくられるもの。将棋盤の製法は時代によって変わっていいし、いまの時代には印刷という方法があってもいいと突き進みました」

泉さんは百貨店にお願いして、手作業で目を盛った盤と印刷した盤を売り場に並べてみました。すると印刷した盤の方が圧倒的に売れ、それを境に問屋での取り扱いが拡大したそうです。

最近も、2枚の板をスライド式に差し込むオリジナル将棋盤を開発。時代が求める新しい製品を模索し続けています。

世相を反映する将棋ブーム

1990年代中盤には、羽生善治氏が七冠を独占し空前の将棋ブームが起こります。茨城木工では生産量が従来の3割から5割も急増。将棋を始める子どものため、高級盤を買い求める親が多かったといいます。一方で当時はバブル崩壊後の平成不況とあって、新聞には「お金をかけず自宅で過ごそうと、帰宅部亭主が将棋に熱中」という記事も見られました。

2017年には藤井ブームが到来。「29連勝した頃が一番すごかったですね。生産が追いつかず、一回り大きい碁盤用の木地を将棋盤のサイズにカットし、何とか間に合わせたほどです」と語る泉さん。

『レジャー白書2018』によると、将棋人口は2009年の1270万人をピークに、2016年は530万人まで落ち込みましたが、2017年に700万人に回復。1年間で一気に170万人も増えています。また昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う巣ごもり需要も加わり、改めて家で楽しめる将棋の魅力が見直されました。

こうして振り返ると、将棋盤の需要はまるで世相を映す鏡のようです。

目を盛った瞬間に命が吹き込まれる

さて、ここで製造工程を一から教えてもらいました。まず、北海道産のカツラ、東南アジア産のアガチス、北米産のスプルース（新カヤ）など、樹齢200年から250年の大径木を厳選して仕入れます。木材の見極

めは、必ず泉さん自身がするそうです。

次に木材を乾燥させます。乾燥は「1寸(約3センチ)2カ月」といわれるほど時間のかかる工程。厚い木材の場合は、何年もかかるのだそう。それをカットしてさらに寝かせるときは毛布がかけられ、うかつにめくると割れてしまうこともあるほど繊細です。

その次はいよいよ加工です。木材を将棋盤の大きさに断裁し、粗削り。寸法を整えたら、盤面・側面・底面に機械でカンナがけをします。そして表面に塗装を施し、乾いたらマス目を印刷。「ただの板が、目を盛った瞬間に命が吹き込まれて将棋盤になる。これが醍醐味ですね」と目を細める泉さん。

その後、木ろうを塗って艶出しをしたら完成です。

樽とヒノキの巡り合わせ

14年前からは長男の大輔さんが後継者として将棋盤づくりに取り組んでいます。将棋盤を通して日本文化を発信する仕事に魅力を感じたといいます。しかし将棋盤づくりはブームの波に翻弄されるため、今後の新たな事業の柱として、ヒノキのサウナの製造に乗り出しました。サウナは樽の形をしており、かつての醤油樽が巡り巡って再来したようで、不思議な縁を感じます。さらに、サウナ製造で出たヒノキの木片を使い、将棋盤を作るアイデアがひらめきました。

「ヒノキは香りが良く、硬さも将棋盤に向いています。日本は国土の8割が森林。今後はとことん国産材、できれば茨城産にこだわっていきたいですね」

〝頭脳のスポーツ〟を子どもたちに

次代を担う大輔さんに、今後の抱負を聞きました。「将棋は〝頭脳のスポーツ〟として、スポーツ雑誌で取り上げられる時代になりました。ダンスが小中学校の必修科目になったように、将棋も学校教育に取り入れられないか、可能性を感じています。まず神栖市が全国に先駆けて、小中学校で将棋の授業をしてくれたらうれしいですね」

将棋は競技としても、また日本文化としても大きな魅力があります。日本を代表する将棋盤の産地が神栖市だと知ると、地元がちょっと誇らしく、そして将棋がぐっと身近に感じられませんか？

①原料の木材(左)と目を盛り命が吹き込まれた将棋盤(右)
②脚付盤の裏側には「血だまり」といわれる穴が彫られている
③将棋の新たな可能性を語る泉大輔さん
④ヒノキを使用したサウナ

広報かみすが動き出す

1 アプリをダウンロード・起動

【COCOAR2】

2 表紙にスマートフォンをかざすスペシャルムービーが楽しめる

広報かみすでは、AR がある写真にスマートフォンをかざすと動画が見られるARサービスを始めました。写真や記事と連動した動画が視聴できます。スマートフォンをお持ちの人は無料アプリCOCOAR2(ココアル2)をダウンロードし、ぜひお楽しみください。